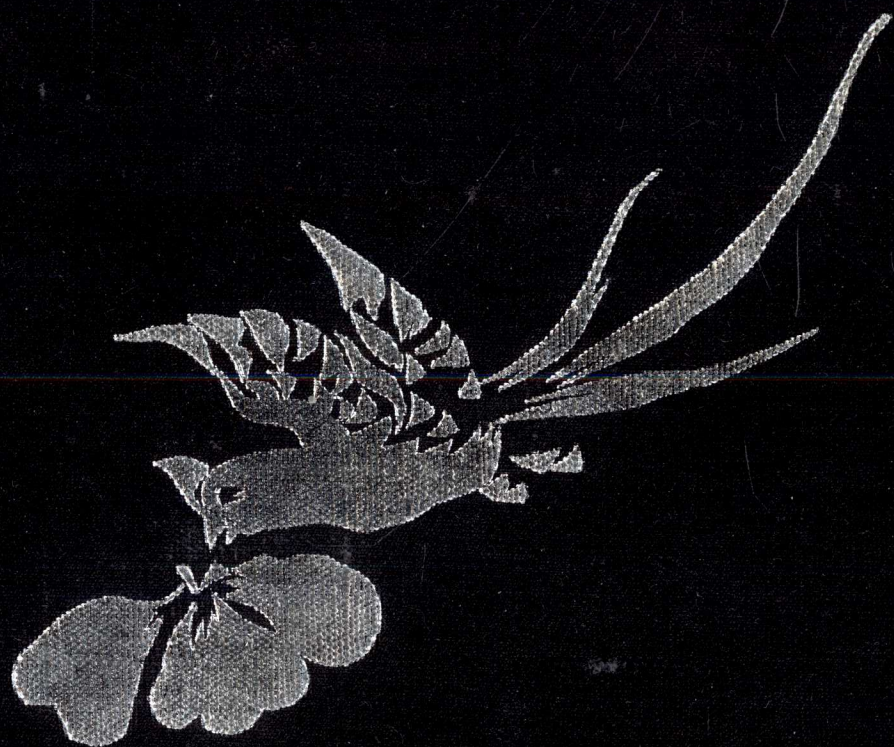






132975

津宮久孝

美華集注釋



卷第二

中央公論社

萬葉集注釋卷第二 奥附

昭和三十三年四月十五月初版 昭和四十八年十一月二十日十四版

著者 澤瀉久孝 おもだかひさたか

發行者 高梨茂

印刷者 北島義俊

製版印刷所 大日本印刷株式會社東京

都新宿區市谷加賀町一丁目十二番地 發行所 中央公論社東京都中央區京橋二丁目一番

地振替東京三四番

定價二千圓



本文抄造

三菱製紙株式會社

表紙麻布

望月株式會社

口繪(コロタイプ)

株式會社東京寫眞印刷所

製本所

小泉製本株式會社

製版所

加藤製版印刷株式會社

凡例

一、原本の傳はらない古典の注釋の底本としては、その原本の時代に近い古寫本か、世に最も廣く行はれてゐる流布本か、いづれかが用ゐられがちであるが、兩者に一長一短のある事、他の古典の場合にも既に述べられてゐるところである。

私はその兩者の長を採らうとして底本の二本立といふ事を思ひついた。定本萬葉集以來、西本願寺本を底本とする事が二三の注釋書にも行はれてゐるが、それは廿卷完備した最も古い寫本としてうなづかれる態度ながら、西本願寺本と流布本とは大體系統を同じくするものであるから、私は系統を異にする古寫本と流布本（寛永本）とを照合して、兩者の間に異同がある場合はその正しいと認めた方を採つた。従つてそのいづれか一本が誤と明瞭に認められるものは一々注を加へない。その底本とした二本以外の諸本、諸注によつて訂正したもののみ注を加へた。たとへば（元目）自とあるは二つの底本には「目」とあるが、元曆本に「自」とあるによつた事を示し、（起）野とあるものは底本たる二本には「野」の文字なく紀州本によつて補つた事を示し、（考末）末とあるは底本をはじめ諸本に「末」とあるを萬葉考によつて「末」と改めたものであり、（四其）四其とあるは二つの底本その他に「已具」とあるが、「四其」の誤と認むべきでないかと思はれるものである。

一、流布本と系統を異にする古寫本は殆ど廿卷完備したものなく、中には斷簡に過ぎないものもあるから、歌一首一首についてどの古寫本を底本としたかを注記した。それによつてその歌の古寫本がどのあたりまで溯り得るかを明らかにし、訓詁の參考にすると共に、古寫本の新なる發見に備へる事も出來ようと考へたからである。たとへば原文の下に（類、六・六）とある歌は、桂、金、天、元等の古寫本は傳はつてゐない事を示すものである。それら古寫本の時代については正確には定め難いが、本書に底本とするに當つては次の如き順序によつた。

桂、金、藍、天、元、金砂子切、類、古、紀、尼、嘉。

一、古寫本の校合は複製本のあるものはすべてそれによつた。複製本に漏れたものは原本によつた。その場合はその所在を明らかにした。陽明本と京大本とは著者みづから原本について校合を加へた透寫本（著者所藏）を用ゐた。冷泉本、金澤文庫本、細井本、大矢本は校本萬葉集の注記に従つた。

一、原文の文字は大體舊字體（當用漢字體に非ずといふ意味）を用ゐたが、誤字考察のたよりを考へて、原本又は原本に近き書體と認められるものはそれによつた。「尔」（二・五）、「頌」（二・二二）、「礼」（二・二六）、「噯」（二・三〇）、「哭」（二・三十一）の如きである。

一、原文の下の注記（類、十四・八五）は類聚古集第十四卷八十五頁の意であり、（古、五・一二才）とあるは古葉略類聚鈔第五冊十二丁表の意である。古葉略類聚鈔の現存の卷は八、九、十、十二と、卷名不明の卷との五冊であるが、本書では複製本にかりに一、二、三、四、五と名づけられてゐるのに従つた。

一、本文に引用の萬葉集の歌には番號を記した。（三・三三）とあるは卷三にある四二一番の歌である。卷數をあげないものはその注釋の卷の中の歌である。

一、萬葉集以外の歌集その他諸書の下の數字はすべて卷數を示す。日本書紀は卷數によらず單に神代紀上、神武紀などと記した。古事記も中卷、下卷など書かず、神武記、仁德記などと記した。伊勢物語は池田龜鑑氏の校本にも採用せられてゐる天福本の段數をあげた。新撰字鏡は天治本によつた。享和本、群書類従本によるものは(享)(群)と注した。「倭名抄」と書いたものは倭名類聚抄十卷本であり、「和名抄」と書いたものは同、廿卷本である事を示した。高山寺本は(高)と注した。類聚名義抄は(佛、上)(法、中)など注したものは觀智院本である。色葉字類抄(上)(中)など記したものは三卷本(古典保存會刊)であり、伊呂波字類抄(一)(二)など記したものは十卷本(日本古典全集所收)である。

一、書名を省略して引用したものを左に掲げる。

桂	桂本萬葉集	文	金澤文庫本萬葉集
金	金澤本萬葉集	壬	傳王生隆祐筆本萬葉集
藍	藍紙本萬葉集	嘉	嘉曆(傳承)本萬葉集
天	天治本萬葉集	紀	紀州本(校本に神田本とあるもの)萬葉集
元	元曆(校)本萬葉集	西	西本願寺本萬葉集
類	類聚古集	細	細井本萬葉集
古	古葉略類聚鈔	陽	陽明文庫本萬葉集(京都大學所藏。校本に溫故堂本とある原本)
尼	尼崎本萬葉集	矢	大矢本萬葉集
冷	冷泉本萬葉集		

京 京大本萬葉集（校本に京都帝國大學本とあるもの。曼殊院舊藏）

無 無點本萬葉集

附 附訓本萬葉集

寬 寬永本萬葉集

仙 萬葉集註釋

（仙覺抄ともいふ）

仙 仙 覺

拾 萬葉拾穗抄

北村 季吟

管見 萬葉集管見

下河邊長流

代 萬葉代匠記

契 沖

（引用にあたり平かなを用ゐたものは初稿本、片カナを用ゐたものは精撰本）

章 萬葉集童蒙抄

荷田 信名

考 萬葉考

賀茂 眞淵

槻 萬葉集槻乃落葉

荒木田久老

玉 萬葉集玉の小琴

本居 宣長

略 萬葉集略解

加藤 千蔭

選要抄 萬葉選要抄

惠 岳

檣の杣 萬葉集檣の杣

上田 秋成

檜 萬葉集檜婦手

橘 守部

攷 萬葉集攷證

岸本由豆流

古義 萬葉集古義

鹿持 雅澄

註疏 萬葉集註疏

近藤 芳樹

動植正名 萬葉古今動植正名 山本章夫

美 萬葉集美夫君志

木村 正辭

文字辨證 萬葉集文字辨證

木村 正辭

字音辨證 萬葉集字音辨證

木村 正辭

訓義辨證 萬葉集訓義辨證

木村 正辭

新考 萬葉集新考

（安藤野雁と井上通泰と兩氏に同名の著書があるので、井上氏新考と記したところがあるが、安藤氏のものは引用するところが少く、單に新考とあるは井上氏のものである。それも歌文珍書保存會刊行のものと國民圖書株式會社刊行のものとあり、主として前者によつたが、「増訂」と記したところは後者によつたものである。）

増、選 増訂本萬葉集選釋

佐佐木信綱

口譯 口譯萬葉集

折口 信夫

新講 萬葉集新講

次田 潤

新訓 新訓萬葉集

佐佐木信綱

講義 萬葉集講義

山田 孝雄

新解 萬葉集新解

武田 祐吉

新釋 萬葉集新釋

澤瀉 久孝

(伊藤左千夫氏にも同名の著がある。その場合は著者の名をあげた。)

私解 萬葉集私解

花田比露思

精考 萬葉集精考

菊地 壽人

綜合研究 萬葉集の綜合研究

折口信夫
窪田空穂
その他

全釋 萬葉集全釋

鴻巣 盛廣

難語難訓攷 萬葉難語難訓攷

生田 耕一

總釋 萬葉集總釋

武田祐吉
土屋文明
その他

秀歌 萬葉秀歌

齋藤 茂吉

評釋篇 柿本人麿評釋篇

齋藤 茂吉

鴨山考補註篇 柿本人麿

鴨山考
補註篇
齋藤 茂吉

雜纂篇 柿本人麿雜纂篇

齋藤 茂吉

新見 萬葉集新見

森本 治吉

講話 萬葉集講話

澤瀉 久孝

古徑 萬葉古徑

澤瀉 久孝

作品と時代 萬葉の作品と時代

澤瀉 久孝

新校 新校萬葉集

澤瀉 久孝
佐伯 梅友

定本 定本萬葉集

佐佐木
武田 祐吉

植物新考 萬葉植物新考

松田 修

動物考 萬葉動物考

東 光治

續動物考 續萬葉動物考

東 光治

全註釋 萬葉集全註釋

武田 祐吉

(改造社版と角川版とがある。本書は主として前者によつたが、増訂されたところは後者によつた。現代かなづかひになつてゐるものは後者よりのものである。)

評釋 萬葉集評釋

(橋田東聲氏、金子元臣氏、窪田空穂氏に同名の書がある。本書には著者の名を附して引用した。)

萬葉集評釋 (橋田東聲氏、金子元臣氏、窪田空穂氏に同名の書がある。本書には著者の名を附して引用した。)

評釋 萬葉集

佐佐木信綱

(これも著者の名を附した。)

大成 萬葉集大成

平凡社版

歌人の誕生 萬葉歌人の誕生 澤瀉

久孝

私注 萬葉集私注

土屋 文明

古典大系本 古典文學大系本 萬葉集

高木市之助
五味 智英
大野 晋

一、本書へ引用の雜誌名で、同名が他にもありなどして疑問をもたれるかと思はれるものの發行所を左にあげておく。

國文學 關西大學國文學會

女子大國文 京都女子大學文學會

一、引用の諸書の文章は文字もみだりに變更しなかつた。但、假名に一切濁點を用ゐないものは、馴れない讀者の不便を考へて濁點を加へた。仙覺抄、代匠記などの注の如きである。

一、現代諸家の論攷の題目には「」を加へ、單行本には『』を加へて區別した。

一、上代特殊假名遣については本書中それぞれの場合に當つて述べたが、初學の方の爲に、萬葉ではア行のエ(衣)とヤ行のエ(延)との區別の他に次の十二音の區別があつた事を列舉しておく。

(甲類) 伎、祁、古、蘇、刀、努、比、敝、美、賣、用、路

(乙類) 紀、氣、許、曾、止、乃、非、閑、未、米、余、呂

これについてまとめて述べられたものに、

『古代國語の音韻に就いて』 橋本 進吉

『上代語の訓詁と上代特殊假名遣』(『大成』訓詁篇上、所收) 大野 晋
などがある。

萬葉集注釋卷第二

萬葉集卷第二

相聞

難波高津宮御宇天皇代	一三
磐姫皇后思天皇御作歌四首(全一八)	一四
或本歌一首(八)	二四
古事記歌一首(九)	二七
近江大津宮御宇天皇代	三一
天皇賜鏡王女御歌一首(九)	三一
鏡王女奉和歌一首(九)	三六
內大臣藤原卿娉鏡王女時鏡王女贈內大臣歌一首(九)	三九
內大臣報贈鏡王女歌一首(九)	四四
內大臣娶采女安見兒時作歌一首(九)	四八

- 久米禪師娉_ニ石川郎女_ニ時歌五首 (六—一〇〇) 五〇
- 大伴宿柁娉_ニ巨勢郎女_ニ時歌一首 (一〇一) 五八
- 巨勢郎女報_レ贈歌一首 (一〇二) 六〇
- 明日香清御原宮御宇天皇代 六一
- 天皇賜_ニ藤原夫人_ニ御歌一首 (一〇三) 六二
- 藤原夫人奉_レ和歌一首 (一〇四) 六四
- 藤原宮御宇天皇代 六八
- 大津皇子竊下_ニ於伊勢神宮_ニ還上時大伯皇女御作歌二首 (一〇五—一〇六) 六八
- 大津皇子贈_ニ石川郎女_ニ御歌一首 (一〇七) 七三
- 石川郎女奉_レ和歌一首 (一〇八) 七四
- 大津皇子竊婚_ニ石川女郎_ニ時津守連通占_ニ露其事_ニ皇子御作歌一首 (一〇九) 七五
- 日並皇子尊賜_ニ石川女郎_ニ御歌一首 女郎字曰大名兒 (一一〇) 七八
- 幸_ニ吉野宮_ニ時弓削皇子賜_ニ額田王_ニ歌一首 (一一一) 八二
- 額田王奉_レ和歌一首 (一一二) 八四
- 從_ニ吉野_ニ折_ニ取蘿生松柯_ニ遣時額田王奉入歌一首 (一一三) 八七

但馬皇女在 _二 高市皇子宮 _一 之時思 _二 穗積皇子 _一 御作歌一首 (二四)	八九
勅 _二 穗積皇子 _一 遣 _二 於近江志賀山寺 _一 時但馬皇女御作歌一首 (二五)	九四
但馬皇女在 _二 高市皇子宮 _一 時竊接 _二 穗積皇子 _一 之事既形而後御作歌一首 (二六)	九六
舍人皇子御歌一首 (二七)	九七
舍人娘子奉 _レ 和歌一首 (二八)	九九
弓削皇子思 _二 紀皇女 _一 御歌四首 (二九—三三)	一〇三
三方沙弥娶 _二 園臣生羽之女 _一 未 _レ 經 _二 幾時 _一 臥 _レ 病作歌三首 (三一—三五)	一一〇
石川女郎贈 _二 大伴宿祢田主 _一 歌一首 (三六)	一一八
大伴宿祢田主報贈歌一首 (三七)	一二一
石川女郎更贈 _二 大伴宿祢田主 _一 歌一首 (三八)	一二二
大津皇子宫侍石川女郎贈 _二 大伴宿祢宿奈麻呂 _一 歌一首 (三九)	一二一
長皇子与 _二 皇弟 _一 御歌一首 (四〇)	一三三
柿本朝臣人麻呂從 _二 石見國 _一 別 _レ 妻上來時歌二首 并短歌 (三一—三七)	一四〇
或本歌一首 并短歌 (三八—三九)	一七五
柿本朝臣人麻呂妻依羅娘子与 _二 人麻呂 _一 相別歌一首 (四〇)	一八一

挽歌

後岡本宮御宇天皇代……………	一八五
有間皇子自傷結 _二 松枝 _一 歌二首（ _{四一} — _{四二} ）……………	一八五
長忌寸意吉麻呂見 _二 結松 _一 哀咽歌二首（ _{四三} — _{四四} ）……………	一八九
山上臣憶良追和歌一首（ _{四五} ）……………	一九二
大寶元年辛丑幸 _二 紀伊國 _一 時見 _二 結松 _一 歌一首（ _{四六} ）……………	一九四
近江大津宮御宇天皇代……………	一九五
天皇聖躬不豫之時太后奉御歌一首（ _{四七} ）……………	一九五
一書歌一首（ _{四八} ）……………	一九八
天皇崩後太后御作歌一首（ _{四九} ）……………	二〇一
天皇崩時婦人作歌一首 未詳姓氏（ _{五〇} ）……………	二〇三
天皇大殯之時歌二首（ _{五一} — _{五二} ）……………	二一〇
太后御歌一首（ _{五三} ）……………	二一七

石川夫人歌一首 (二五)	一二〇
從 _二 山科御陵 _一 退散之時額田王作歌一首 (二五)	一二二
明日香清御原宮御宇天皇代	一二五
十市皇女薨時高市皇子尊御作歌三首 (二五—二六)	一二五
天皇崩時太后御作歌一首 (二六)	二四〇
一書歌二首 (二六—二七)	二四四
天皇崩之後八年九月九日奉爲御齋會之夜夢裏習賜御歌一首 (二六)	二五九
藤原宮御宇天皇代	二六三
大津皇子薨後大來皇女從 _二 伊勢齋宮 _一 還 _レ 京之時御作歌二首 (二六—二七)	二六四
移 _二 葬大津皇子屍於葛城 _一 二上山 _一 之時大來皇女哀傷御作歌二首 (二六—二七)	二六九
日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首 并短歌 (二七—二八)	二七六
或本歌一首 (二八)	二九九
皇子尊舍人等慟傷作歌廿三首 (二八—二九)	三〇一
柿本朝臣人麻呂獻 _二 泊瀨部皇女忍坂部皇子 _一 歌一首 并短歌 (二九—三〇)	三三七
明日香皇女木臨殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首 并短歌 (三〇—三一)	三四九

高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌（二九—三二）……………三六九

或本歌一首（一〇一）……………四一〇

但馬皇女薨後穗積皇子冬日雪落遙望御墓悲傷流涕御作歌一首（三三）……………四一四

弓削皇子薨時置始東人作歌一首并短歌（一〇四—一〇六）……………四二〇

柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌二首并短歌（一〇七—一一一）……………四二四

或本歌一首并短歌（一一三—一一六）……………四五九

吉備津采女死時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌（一一七—一二一）……………四七〇

讚岐狹岑嶋視石中死人柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌（一二二—一二六）……………四八四

柿本朝臣人麻呂在石見國臨死之時自傷作歌一首（一二七）……………四九九

柿本朝臣人麻呂死時妻依羅娘子作歌二首（一二八—一三二）……………五〇四

丹比真人名闕擬柿本朝臣人麻呂之意報歌一首（一三三）……………五〇八

或本歌一首（一三七）……………五一〇

寧樂宮……………五一二

和銅四年歲次辛亥河邊宮人姬嶋松原見孃子之屍悲嘆作歌二首（一三六—一三九）……………五二二

靈龜元年乙卯秋九月志貴親王薨時歌一首（一四〇—一四三）……………五一五